

いづくかんきん

山は神

第75号 H22年11月

伊豆市 法住寺 発行

今年の夏の話です。

境内の裏庭に小さな池があり、山の水をひいています。今年の猛暑、池の水が枯れないか、気になる毎日でした。

朝起きると、まず池の水を見ます。わずかながら水は出ています。ホツとして池の鯉に餌をやり、本堂を開け朝のお勤めです。

*

そんな日課を繰り返すのですが、さすがに何十日も雨が降らず、しかも もの凄い暑さ、池の水が更に気になります。それでも山の水は、チョロチョロながらも涸れませんでした。山は凄いなと思いはじめました。

そんなある日、運転しながら道路沿いの大見川を見ると、延々と水が流れているのです。もうバケツ何杯なんてもんじやない、昼も夜も、この水は山から流れ続けているのです。

もう七十日、雨らしい雨はないのです。直感しました、「山はカミだ」。

科学的には山の保水力とか、七月初めに雨が多かつたとか説明されるのでしようが、もうこの大自然の現実には、そんな説明は、吹っ飛んでしまいました。

*

真夏の昼寝は良いものです。横になって宮沢賢治の童話を読んでいたら、こんな話がありました。

「ずうつと昔、岩手山の麓の森に、四人の百姓たちが家族を連れてやってきます。」

《そこで四人の男たちは、てんでにすぎ

な方へ向いて、声をそろえて叫びました。

「ここへ畑起こしてもいいかあ」

「いいぞお」森が一せいにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「ここに家を建ててもいいかあ」

「ようし」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた声をそろえてたずねました。

「ここで火をたいてもいいかあ」

「いいぞお」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木をもらってもいいかあ」

「ようし」森は一せいにこたえました。

男たちはよろこんで手をたたき、さつき

から顔色を変えて、しんとしていた女や子どもらは、にわかにはしゃぎだして、子供らはうれしきまぎれに喧嘩をしたり、女たちはその子どもをぼかばかなぐったりしました。「狼森と笹森、盗森」より》

「それから森と百姓との間には、いろいろな出来事が起こり、毎年収穫が増え、粟餅を山にお供えして、山と人とがなかよくなつていくのでした。」

先人たちは、何百年、何千年と、ずうつと、山を恐れ慄き、敬い、親しんで命を繋いできたことを想いました。

*

今の時代、経済的な価値だけでモノを見がちで、山はお金にならないと、安易に売買されているとも聞きます。「山はカミ」、山を荒らしたら大変なことが起こるでしょう。原初の人々を想い、山への畏敬の念を確かなものにしたと思ったのです。

美しく清浄な「寿量の杜」を創りたいという願いは、そうした先人に通ずるものがあります。

「大自然 ありがとうございませす。合掌

「寿量の祈り」

お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

この夏の酷暑を忘れさせてくれる様な秋風がや々と吹き、約束通り季節は冬に向かっています。

それにしても、誰もが「この暑さは、何時まで続くのだろうか」と不安になり、お彼岸に入っても口々に「彼岸花がまだ蕾だよ」、「いつもなら満開なのに……」等と話していました。ところがお中日の法要のさ中に、突然、冷たい風が本堂の中に吹き渡り、皆 そのことに驚いて、正直な彼岸花等は、十日遅れて満開となりました。

*

何もかもが目まぐるしく変化していくこの時代に、人々はやはり「変わらない何か」を望んでいるのだと思いました。

変わらないもの、変わって欲しくないものとは何でしょう。

私にとっては信ずる心、信じあえることによつてもたらされる「心の安心(あんじん)」。地位とか、名誉とか、お金とか、若さとか、そういう目に見えるものより、見えないけれど「信じるものがある」という幸せ。それは形には見えないけれど、確かに存在していて

だからこそ尊く、有難い。

*

「お金があれば満足は買えるけれど、幸せまでは買えない」と言う人がいる。お金を持ち得た人の言葉であろう。一方で、慎ましかに暮らしているけれど、家族が、お互いを思いあつて、信じあつて、生きている様は、何にも増して尊く、美しく思える。目には見えないけれど、確かに存在する「信じあえる心がある幸せ」に気づくことも、他人の一言の中にも、無限の喜びを見いだせるのだ

だ

と思う。

お会式



境内では賑やかに万灯供養



夜の万灯、意気よ天高く届け



縁のあるお宅の前で供養



お寺の坂、もう少しです

大洋君は鎖骨骨折、太鼓が持てません。ママの太鼓でソレラー

仏讃歌の流れる中、献灯



九五歳、お寺のおばあさん



退任役員さんに感謝状



今年も沢山の子供たちが献花



今年も、善いお会式ができました。

台風の直撃も心配されましたが、お陰さまで、滑り込みセーフの天気。万灯行列も

出て、葦山の実成寺万灯講さんも応援に来てくれ、夜のライトアップも盛大でした。

お会式法要では、今年も沢山のお子さんが献灯献花、「今ささぐぐ」の仏讃歌が流れ、子供たちが清らかな灯りを厳かにお供えす

ると、お会式って良いなあと思うのでした。

今年、特に感じたのは、「私たちのお会式」という意識の方が多くなってきたことです。山下一護持会長さんを中心に、役員さんが良く動いて、これまでの役員さんが培ってきた伝統を感じました。お勝手の女衆さんも朝八時から夜の八時過ぎまで、大変でしたが気持ちよくご奉仕、白龍会(小塚順一会長)の皆さんも、十月の初めから練習、皆を元気にしてくれました。

こうしたご奉仕ご供養が、お祖師さまへのご給仕です、ありがとうございます。

退任役員さんに感謝状

三月末をもって退任された役員さんに、住職から感謝状と心ばかりの記念品が贈呈されました。次の方々で、心から御礼申し上げます。今後ともお寺に足を運び、ご協力下さいますよう宜しくお願い致します。

・第十八(h16.4~19.3) 十九期(h19.4~22.3) 世話人

小塚昭男さま、三田泰男さま

・第十九期 世話人

杉山勲さま、山田隆二さま、森野博さま、室野則義さま、飯田安久さま

募集

「寿量の祈り」は、南無妙法蓮華経のお題目を、より具体的、実践的に提唱したもので、この祈りを広く伝える為に、いろいろな方々からご意見を伺ったり、検討会を開いたりする予定です。

・思いつきやフリーのご意見をお寺に、またはホームページの「お問い合わせサイト」、メール等にてお寄せ下さい。

・検討会に参加して頂ける方は、ご連絡頂ければ幸いです。時期は来春を予定しています。

・会場場所 法住寺、東京、横浜

・ホームページ

検索 ↓ 寿量の会

法住寺

・メールアドレス juryonokai@jyryo.jp

境内整備作業

秋のお彼岸前は、清水の皆さんのご奉仕で、草刈りと、本堂前枝垂れ桜の柵に使う丸太の皮剥ぎを行って下さいました。
年末の作業は、元村②の皆さんにお願い致します。



洋明さんのおはなし

御志納金 「八月〜十月」

五十万円	清水	森野健次殿	尊父葬儀の砌
五十万円	清水	小塚順一殿	尊母葬儀の砌
三十万円	元村	伊東六郎殿	尊母葬儀の砌
三十万円	横浜市	山下敏征殿	尊母葬儀の砌
二十万円	元村	井本和男殿	尊父一周忌の砌
十万円	故	井本さち殿	

「寿量の塔志納」

二十万円	東京	曾我部昌江殿	夫君追善供養
------	----	--------	--------

今月は長女、采海(あやみ)の七五三祝い。お寺では仏さまや、鬼子母神さまをはじめ、皆さんをご守護してくださる神さまのお詣りをお受けしています。

発育円満や智慧明瞭など、これから温かく見守って頂ける様にとご祈禱をし、一つの節目を大切にしていけます。

*

さて今年も、境内の桜の葉が舞う季節になりました。どれだけ掃除をしても、風が吹き、次の日の朝になると、また同じ光景が。そんな時、煩惱を持った私は、掃除を怠けたくなることもあります。

しかし、住職の「お寺に来た方が、少しでも気持ちよくお詣りできるように、いつもきれいに、清浄に」とのありがたい言葉。

時に、境内に落ち葉が舞いませんようにとお願ひしたくなることも。でもさすが仏さま。慈悲の心で、そんな哀れな心を持った私に、掃除から得る大切な心を与えてくださいます。

*

法華経の第十六番目のお経『寿量品』の一節には『我常知衆生 行動

不行動 隨應所可度 為説種種法』と説かれています。

仏さまは、私たちが何を行い何を行わないか、一人一人の全てをご存知で、その時々に応じて様々な教えや、心持ち、歩む道を示してくださるという意味です。

*

掃除の際、私の怠け心を知っていた仏さまは、住職を通して「いつもきれいに、清浄に」と言ってくくださったのでしよう。

掃除をすることで知らず知らずの内に色々な行を行っていることにも気付かされます。そこには、見返りを求めない布施の行や、心を落ち着ける禅定の行、精進の行、心を清浄にする行など。その時々によって仏さまが教えてくださいます。

また、皆さんがお詣りして下さいるのも、やはり仏さまのご縁、そのご縁が掃除の励みになります。

今朝も境内は落ち葉が舞っています。これも仏さまの教え。そのなかで少しでも皆さんが気持ちよくお参り頂けるように、心身清浄にほうきと塵取りを手にとって行きたいと思ひます。